

プラットフォーム参加大学等の学生の成長実感に関する分析について (共同IR報告書)

1. はじめに

大学コンソーシアム市川は 2018 年 11 月、千葉縣市川市に所在する5つの高等教育機関(3大学、2短期大学)が教育資源や機能等の活用を図りながら幅広い分野で相互に連携協力し、教育・研究の質的向上を図り、地域社会の発展に資することを目的として設立されました。また、同時にこの大学コンソーシアム市川と市川市及び市川商工会議所との三者間の包括連携協定を締結し、「大学コンソーシアム市川産官学連携プラットフォーム」を形成しました。

本プラットフォームの特徴は、それぞれの高等教育機関のリソースを共同活用し、都市型の具体的な地域課題を、実践的な学びの中で解決することにあります。この目的を達成するため、本プラットフォームでは、市川市及び市川市内の高等教育機関を取り巻く現状を分析し、課題、目標及び実行に向けた具体的なプロセスを中期計画(2024 年度～2028 年度)としてまとめています。同中期計画では、地域の多様なステークホルダーと連携・協働できる「地域つながり力」を持つ人材の育成を目指し、11 の取組目標を設定しています。具体的には、各高等教育機関のリソースを共同活用し、「地域活性化に貢献する経営マインドを持った人材の育成」「ゆとりある子育て環境」「高齢化社会に対応した地域医療・福祉サービス」「現代社会にあった都市型ビジネスの展開」等の地域課題に対して、教育・研究活動と地域連携を結び付けながら取り組むこととしています。これらの取組を通じて、地域社会の課題を自らの学びと結び付け、多様な主体と協働しながら解決に取り組むことのできる人材を育成し、地域の高等教育の充実及び地域社会の発展に寄与することを、本プラットフォームのビジョンとして掲げています。

このビジョンを実現するためには、各高等教育機関の教育活動が、学生の学びや成長にどのようにつながっているのかを把握し、その結果を教育改善に活用していくことが重要です。本共同 IR では、これまで学生生活等に関するアンケート調査やオンライン授業に関する意識調査を通じて、各校の学生の状況や教育活動上の課題について検討を行ってきました。

これまでの本共同 IR では、2020 年度、2022 年度、2024 年度の 3 回にわたり報告書を作成し、各校のホームページにて公開しています。今回で4回目となる本報告書では、文部科学省において重視されている学修者本位の教育への転換、教学マネジメントの確立、学修成果の可視化及び内部質保証の実質化といった動向も踏まえ、「学生の成長実感」を共通テーマとして設定しました。学生の成長実感は、学修成果や学生生活の充実度を学生自身の主観的な評価から捉えるものであり、各校の教育課程、学生支援、キャリア形成支援等の取組が、学生にどのような学びや成長として認識されているかを検討するための有効な手がかりとなります。こうした分析を通じて、各校の教育改善に資する知見を得るとともに、本プラットフォームが掲げる「地域つながり力」を持つ人材育成の取組を、より実効性のあるものとしていくことを目指します。

本報告書では、千葉商科大学、和洋女子大学、昭和学院短期大学及び環太平洋大学国際経済経営学部が、それぞれ既存の学生生活実態調査、卒業時アンケート、卒業生調査、授業アンケート等を活用し、「学生の成長実感」に関連する項目について、各校の問題意識に基づき分析を行った結果をまとめました。各校で調査項目、対象学年、実施時期等が異なるため、単純な数値比較を目的とするのではなく、各校の分析結果から学生の成長実感を高める要因や教育改善に向けた示唆を整理し、大学コンソーシアム市川における今後の教育・研究及び

IR 活動の充実に資することを目指します。

2. 調査・分析方法

千葉商科大学、和洋女子大学、昭和学院短期大学および環太平洋大学国際経済経営学部が定期的実施している各種学生アンケート調査において、「学生の成長実感」を分析の軸とし、関連する質問項目を対象に結果の集計・分析を行いました。次章では、各校の詳細について報告します。

3. 分析結果

学生の成長実感分析結果（大学ごと）

① 千葉商科大学

分析テーマ：千葉商科大学における卒業生の学修成果・成長実感に関する分析

（ア）背景

高等教育における教学マネジメントでは、学修成果・教育成果を多元的に把握・可視化し、学生自身が身に付けた資質・能力を自覚できるようにすることが求められています。学生の「成長実感」は、多様な教育活動や学修経験、課外活動、進路意識など、さまざまな学生ステータスと関連する可能性がある指標であり、学修成果を学生自身の視点から捉えるための重要な情報として期待されています。

しかし、成長実感が実際にどのような教育活動や学修経験によって形成されているのか、また、その実感が学生の成長や進路にどのような影響を与えているのかについては、本学において十分に検証できているとは言えません。そのため、成長実感を学修成果の指標として活用するためには、それが学生にとって意味のあるアウトカムとどのように関連しているかを明らかにする必要があります。

本学は日経キャリアマガジン特別編集『価値ある就職力ランキング 2026-2027』の「採用を増やしたい大学」において、全国私立大学第 1 位（全国第 9 位）にランクインしており、社会や企業からの評価にも注目が集まっています。このような背景から、本学の教育活動を通じて培われた学びが、卒業後の進路やキャリア形成にどのようなつながっているのかを把握することは重要な課題となっています。

そこで本分析では、成長実感と関連するアウトカムの一つとして「キャリア満足度」に着目します。キャリア満足度は、自身の進路選択に対する肯定的な評価を示すものであり、大学での学びを通じて培われた資質・能力が進路選択や将来展望にどのように結び付いているかを示す指標の一つと考えられます。本分析では、まずは、今回注目した成長実感とキャリア満足度との関連を検証することで、本学における「学び」と「キャリア」のつながりの可視化につなげていき、その後の発展的な検証・分析として、「成長実感」が「学修成果指標」として有効に機能しているかを確認します。

（イ）目的

本分析は、成長実感を学修成果指標として活用するための有効性検証の一環として、成長実感と卒業時のキャリア満足度との関連を確認するものです。

(ウ) 問題

学生の「成長実感(メタ認知)」については、本学のどのような教育活動や学修経験がその形成につながっているのか、またそれが学生のその後の成長や進路にどのような影響を及ぼしているのかを、根拠に基づいて十分に説明できているとは言い難い状況です。

(エ) 仮説

今回の分析では、社会のスタートラインに立つ状況での自身の進路への肯定感(満足度)と学生の成長実感(メタ認知)に着目し、分析を行います。卒業時の「成長実感」と卒業後の進路に対する「キャリア満足度」が関連しているのではないかという仮説を設定し、検証を行います。

(オ) 調査・分析

1. データ概要

・2024 年度および 2025 年度卒業時アンケート: 成長実感、キャリア満足度

回答年度	年度内データ N	成長実感有効 N	キャリア満足度有効 N	備考
2024	1,256	1,256 (3 項目とも同数)	1,256	4 件法の有効値 (1~4) で分析
2025	1,250	1,250 (3 項目とも同数)	1,250	4 件法の有効値 (1~4) で分析

2. 分析手法

本分析では、以下の方法により、卒業時の成長実感とキャリア満足度との関連を検証しました。

○記述統計

- ・ 2024 年度および 2025 年度の卒業時アンケートについて、成長実感 3 項目およびキャリア満足度の回答分布、平均値、標準偏差を年度別確認

○相関分析

- ・ 年度別 Spearman の順位相関分析

○総成長実感の作成と群分け

「専門的な知識・技能」「幅広い教養」「高い倫理観」の 3 項目の平均値を「総成長実感」とし、次の 3 群に分類

- ・ 高群(カテゴリ A): 3.66 以上
- ・ 中程度群: 3.00 以上 3.66 未満
- ・ 低群(カテゴリ B): 3.00 未満

○高群と低群の比較

- ・ t 検定を用いるとともに、群間差の大きさを確認するため効果量算出

○群別の相関分析

- ・ 高群と低群のそれぞれについての、総成長実感とキャリア満足度との相関(年度別)
- ・ 群分けによる得点範囲の制限を踏まえ、群別の相関分析は補足的な分析として位置付け

○入学者選抜区分別の分析

- ・ 2025 年度卒業生の入学者選抜区分別成長実感 3 項目・総成長実感の平均値
- ・ 2024 年度卒業生との比較
- ・ 2025 年度入学生の入学者選抜区分別成長実感 3 項目・総成長実感の平均値 (GPA 分布等)

3. 分析上の留意点

本報告では、千葉商科大学の卒業生データを用い、学生の成長実感（メタ認知）およびキャリア満足度に焦点を当てて、分析を行いました。対象は、2024 年度卒業生および 2025 年度卒業生であり、データが 2 年間に限られることが、分析課題として挙げられます。また、キャリア満足度は就職率とは異なり、学生の選択への納得感を表す主観評価であるため、就職/進学等の客観的成果と混同しないようにする必要があります。

本報告で扱う成長実感は、教育成果そのものを直接測定したものではなく、学修成果を把握するための一つの参考指標として位置づけ、分析を行いました。

また、本分析は、「成長実感（メタ認知）」が学修成果の一側面として捉えられるかを検証する一連の有効性検証の一部として実施するものです。そのため、本分析結果のみをもって成長実感の有効性を結論付けるのではなく、成長実感とキャリア満足度との関連性を確認するための基礎的検証として位置付けています。分析結果の解釈にあたっては、因果関係を示すものではないことや、他の学修成果指標との関係も含めて総合的に判断する必要がある点に留意する必要があります。

4. 検証結果

4-1. 卒業時における成長実感の年度別状況

ディプロマ・ポリシーとの対応を想定して整理した成長実感 3 項目（専門的な知識・技能、幅広い教養、高い倫理観）について、2024 年度と 2025 年度の回答分布を比較しました。回答は 4 件法（「当てはまる」～「当てはまらない」）で実施し、上位回答ほど高い値となるよう数値化しました。いずれの項目も回答「4」が最も多く、年度間の分布はおおむね類似していると考えられます（図 1、表 1）。また、各項目およびキャリア満足度の平均値は 3.48 以上で、標準偏差にも大きな年度差はみられないことから、2 か年の回答傾向は概ね安定していると考えられます（表 2、図 2）。なお、成長実感フラグは、卒業時アンケートで成長を感じた能力を複数選択する設問です。

図 1 成長実感 3 項目の回答者数年度比較（4 件法）



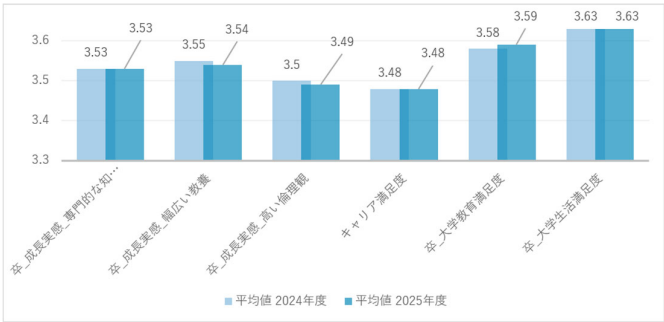
表 1 成長実感 3 項目およびキャリア満足度の回答数の分布 (4 件法)

キャリア満足度	4	3	2	1
2024年度	57.96	35.11	4.22	2.71
2025年度	58.08	34.32	5.2	2.4
卒_成長実感_専門的な知識・技能				
2024年度	58.36	37.26	3.11	1.27
2025年度	58.48	36.88	3.92	0.72
卒_成長実感_幅広い教養				
2024年度	60.59	34.47	3.9	1.04
2025年度	59.92	35.36	3.76	0.96
卒_成長実感_高い倫理観				
2024年度	56.29	38.38	4.06	1.27
2025年度	56.32	37.36	5.36	0.96

表 2 成長実感 3 項目およびキャリア満足度目の平均値・標準偏差

	卒_成長実感_専門的		卒_成長実感_幅広い		卒_成長実感_高い倫		キャリア満足度	
	Mean	StdDev	Mean	StdDev	Mean	StdDev	Mean	StdDev
2024年度	3.53	0.62	3.55	0.62	3.5	0.64	3.48	0.7
2025年度	3.53	0.61	3.54	0.62	3.49	0.64	3.48	0.71

図 2 成長実感 3 項目およびキャリア満足度の平均値 (年度比較)



成長実感 3 項目およびキャリア満足度の平均値は、2024 年度、2025 年度ともに 3.48 以上であり、年度間で大きな変動はみられませんでした (表 2、図 2)。

表 3 大学で身についた能力の選択数 (複数選択可)

	専門的な知識・ 技能	普遍的な知識・ 技能	相互理解・コ ミュニケーショ ン力	チャレンジ精 神・実践力	主体性・責任感	社会規範意識・ 誠実さ
2024年度	842	553	650	464	362	286
2025年度	772	477	624	404	293	200

複数選択による「大学で身についた能力」では、両年度とも「専門的な知識・技能」の選択者数および選択割合が最も高く、次いで「相互理解・コミュニケーション力」「普遍的な知識・技能」の順でした（表 3、図 3、表 4）。一方、すべての項目で 2025 年度の選択割合が 2024 年度を下回っているため、2025 年度回答者が全体として選択肢を少なめに選んだ可能性があり、単純な高低だけでなく、設問理解（抽象的な選択肢等）や回答行動の年度差も含めて継続的に確認する必要があると考えられます（表 4）。

図 3 大学で身についた能力の選択者数（年度比較、複数選択可）

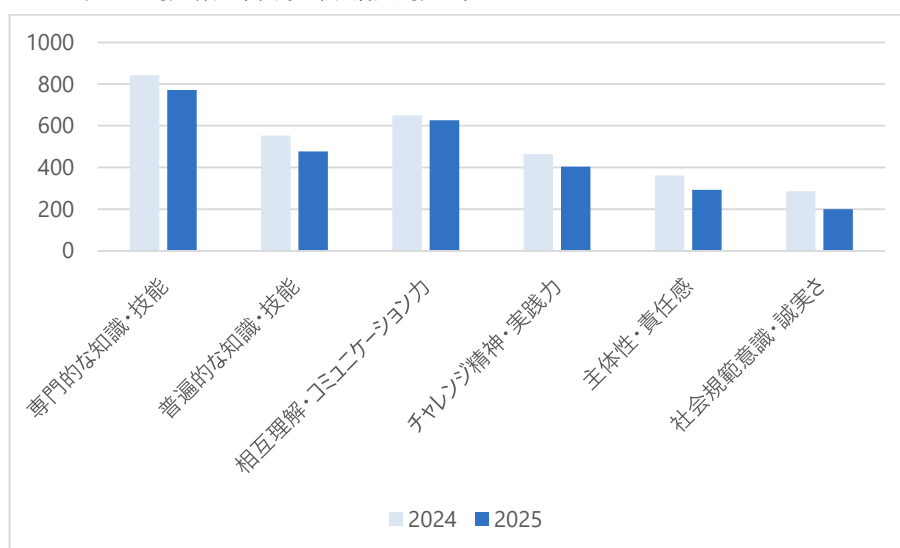


表 4 回答者に占める選択者の割合（年度別総数に対する人数の割合）

回答年度	専門的な知識・技能	普遍的な知識・技能	相互理解・コミュニケーション力	チャレンジ精神・実践力	主体性・責任感	社会規範意識・誠実さ
2024	67.04%	44.03%	51.75%	36.94%	28.82%	22.77%
2025	61.76%	38.16%	50.16%	32.32%	23.44%	16.00%

4-2. 成長実感とキャリア満足度の関連

Spearman 順位相関係数は 0.498 から 0.564 で、すべて統計的に有意でした ($p < .0001$)。したがって、専門的な知識・技能、幅広い教養、高い倫理観の各成長実感が高い学生ほど、キャリア満足度も高い傾向にあり、両者には中程度の正の関連があると考えられます（表 5）。

表 5 成長実感 3 項目とキャリア満足度の Spearman 順位相関係数 (年度別)

2024 年度 (全体)

2025 年度 (全体)

Spearman の相関係数, N = 1256				Spearman の相関係数, N = 1250			
H0: Rho=0 に対する Prob > r				H0: Rho=0 に対する Prob > r			
		キャリア満足度				キャリア満足度	
卒_成長実感_専門的な知識・技能	0.49937		<.0001	卒_成長実感_専門的な知識・技能	0.54513		<.0001
卒_成長実感_幅広い教養	0.49848		<.0001	卒_成長実感_幅広い教養	0.56429		<.0001
卒_成長実感_高い倫理観	0.4981		<.0001	卒_成長実感_高い倫理観	0.52683		<.0001

統計量	自由度	値	p 値	統計量	自由度	値	p 値
カイ 2 乗値	9	409.6803	<.0001	カイ 2 乗値	9	479.4267	<.0001
尤度比カイ 2 乗値	9	367.0688	<.0001	尤度比カイ 2 乗値	9	426.0082	<.0001
Mantel-Haenszel のカイ 2 乗値	1	240.0957	<.0001	Mantel-Haenszel のカイ 2 乗値	1	334.3509	<.0001
ファイ係数		0.5711		ファイ係数		0.6193	
一致係数		0.4959		一致係数		0.5265	
Cramer の V 統計量		0.3297		Cramer の V 統計量		0.3576	

標本サイズ = 1256

標本サイズ = 1250

4-3. 総成長実感の高低とキャリア満足度の関係

さらに成長実感の把握と確認を行うため、「専門的な知識・技能」「幅広い教養」「高い倫理観」の 3 項目の平均値を「総成長実感」とし、次の 3 群に分類し、分析を行いました。

- ・ 高群 (カテゴリ A) : 3.66 以上
- ・ 中程度群 : 3.00 以上 3.66 未満
- ・ 低群 (カテゴリ B) : 3.00 未満

このカテゴリ別の分析は、総成長実感の高群と低群でキャリア満足度の水準が異なるかを検証するために実施しました。これに加えて、群間の平均値差だけでは把握できない群内部の関係を確認するため、各群における総成長実感とキャリア満足度の相関を補足的に算出しました。ただし、総成長実感を基準に群分けした時点で各群の得点範囲が狭くなるため、群内相関は構造的に低くなりやすく、全体相関との係数の大小を直接比較することは適切ではありません。群別相関は、同じ高群または低群の中でもキャリア満足度に応じた総成長実感の違いが残るか、その傾向が年度間で共通しているかを探索的に確認するための補助的な分析として実施しました。

カテゴリ別人数は、2024 年度が高群 736 人、中程度群 423 人、低群 97 人、2025 年度が高群 719 人、中程度群 434 人、低群 97 人でした。2 か年を合算すると、高群は 1,455 人、低群は 194 人となり、高群が低群より大幅に多い構成でした (表 6)。高群と低群のキャリア満足度を比較すると、2024 年度は高群 3.75 点、低群 2.87 点、2025 年度は高群 3.79 点、低群 2.71 点で、両年度とも高群の平均値が有意に高い結果でした (2024 年度: Welch の $t=8.78$, $p<.0001$ 、2025 年度: Welch の $t=10.62$, $p<.0001$) (表 10、表 11、図 6、図 7)。

群別の Spearman 順位相関では、高群は 2024 年度 $r=0.231$ ($p<.0001$)、2025 年度 $r=0.145$

($p=.0001$)で、いずれも弱い正の相関でした。低群は 2024 年度 $r=0.064$ ($p=0.5339$)で有意ではありませんでしたが、2025 年度 $r=0.397$ ($p<.0001$)で弱から中程度の正の相関が認められました(表 8、表 9)。ただし、群分けによって総成長実感の得点範囲が制限され、低群は各年度 97 人に限られるため、群内相関は補足的な結果として解釈する必要があります(表 6、表 8、表 9)。

キャリア満足度別の総成長実感の分布をみると、高群では総成長実感が上限付近に集中し、キャリア満足度による差は小さいと考えられます。一方、低群ではキャリア満足度 1 から 4 の順に総成長実感の平均が 2.05 点、2.27 点、2.31 点、2.38 点と段階的に上昇しており、記述的にはキャリア満足度が高いほど総成長実感も高い傾向がみられます(図 4、表 7、図 5)。ただし、表 7 は 2 か年合算の記述統計であり、年度別の相関結果とは分析単位が異なることに留意が必要です。

表 6 総成長実感のカテゴリ別人数(年度別)

	カテゴリ別実数(人)		
	総成長実感_高グループ 3.66 以上	総成長実感_低グループ 3.00 未満	総成長実感 中程度グループ 3.00 以上 3.65 以下
2024 n=1256	736	97	423
2025 n=1250	719	97	434

図 4 キャリア満足度別にみた総成長実感の度数分布(2 か年合算、カテゴリ別)

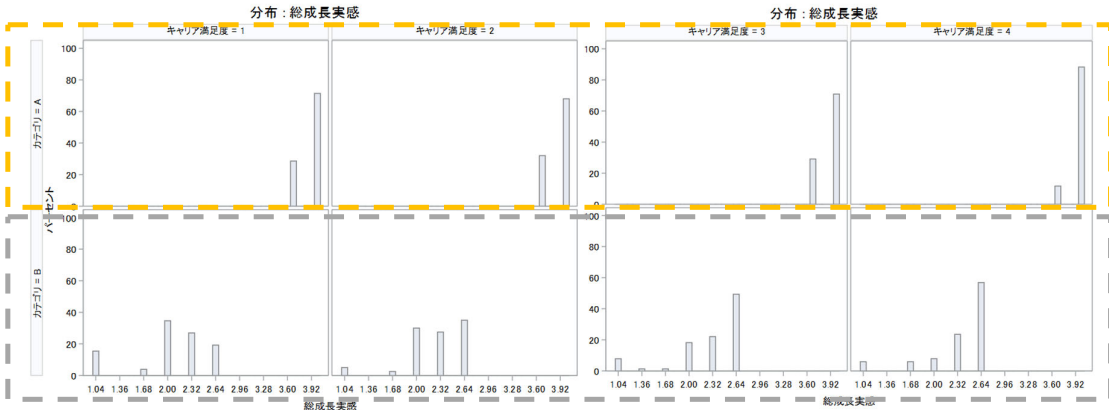


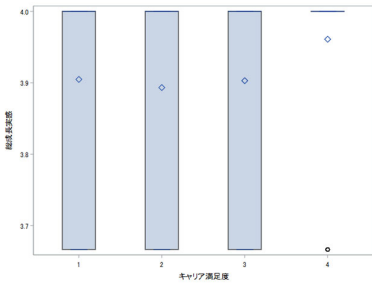
表 7 キャリア満足度別にみた総成長実感の記述統計(2 か年合算、カテゴリ別)

カテゴリ A: 成長実感高群 n=1455 カテゴリ B: 成長実感低群グループ n=194

分析変数: 総成長実感						
カテゴリ	キャリア満足度	Obs 数	平均	標準偏差	最小値	最大値
A	1	14	3.9047619	0.1562691	3.6666667	4
	2	25	3.8933333	0.1586984	3.6666667	4
	3	237	3.9029536	0.1517497	3.6666667	4
	4	1179	3.9609839	0.1072048	3.6666667	4
B	1	26	2.0512821	0.530763	1	2.6666667
	2	40	2.2666667	0.414825	1	2.6666667
	3	77	2.3116883	0.4846705	1	2.6666667
	4	51	2.379085	0.4522517	1	2.6666667

図 5 キャリア満足度別にみた総成長実感の箱ひげ図(2 か年合算、カテゴリ別)

A:成長実感高群



B:成長実感低群

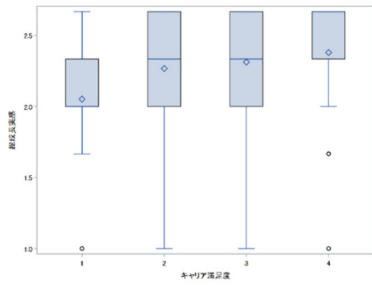


表 8 総成長実感とキャリア満足度の群別相関分析(2024 年度)

卒業年度=2024

度数	表：カテゴリ * キャリア満足度					
期待	カテゴリ	キャリア満足度				
セルのカイ 2 乗		1	2	3	4	合計
	A	12	10	125	589	736
		20.322	26.507	143.14	546.04	
		3.4077	10.279	2.2978	3.3806	
	B	11	20	37	29	97
		2.6783	3.4934	18.864	71.964	
		25.857	77.995	17.435	25.65	
合計		23	30	162	618	833
カテゴリ * キャリア満足度の統計量						
統計量	自由度	値	p 値			
カイ 2 乗値	3	166.3027	<.0001			
尤度比カイ 2 乗値	3	121.2239	<.0001			
Mantel-Haenszel のカイ 2 乗値	1	145.1957	<.0001			
ファイ係数		0.4468				
一致係数		0.4079				
Cramer の V 統計量		0.4468				
標本サイズ = 833						

表 9 総成長実感とキャリア満足度の群別相関分析(2025 年度)

卒業年度=2025						
度数	表：カテゴリ * キャリア満足度					
期待	カテゴリ	キャリア満足度				
セルのカイ 2 乗		1	2	3	4	合計
	A	2	15	112	590	719
		14.979	30.839	133.93	539.25	
		11.246	8.1353	3.5913	4.7762	
	B	15	20	40	22	97
		2.0208	4.1605	18.069	72.75	
		83.361	60.302	26.62	35.403	
	合計	17	35	152	612	816
カテゴリ * キャリア満足度 の統計量						
統計量	自由度	値	p 値			
カイ 2 乗値	3	233.4348	<.0001			
尤度比カイ 2 乗値	3	170.2915	<.0001			
Mantel-Haenszel のカイ 2 乗値	1	230.9334	<.0001			
ファイ係数		0.5349				
一致係数		0.4716				
Cramer の V 統計量		0.5349				
標本サイズ = 816						

卒業年度=2024 カテゴリ=A

1 With 変数:	キャリア満足度
1 変数:	総成長実感

単純統計量						
変数	N	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値
キャリア満足度	736	3.75408	0.55756	4	1	4
総成長実感	736	3.94203	0.12643	4	3.66667	4

Pearson の相関係数, N = 736	
H0: Rho=0 に対する Prob > r	
総成長実感	
キャリア満足度	0.21566
	<.0001

Spearman の相関係数, N = 736	
H0: Rho=0 に対する Prob > r	
総成長実感	
キャリア満足度	0.23116
	<.0001

卒業年度=2024 カテゴリ=B

1 With 変数:	キャリア満足度
1 変数:	総成長実感

単純統計量						
変数	N	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値
キャリア満足度	97	2.86598	0.97499	3	1	4
総成長実感	97	2.30584	0.50614	2.66667	1	2.66667

Pearson の相関係数, N = 97	
H0: Rho=0 に対する Prob > r	
総成長実感	
キャリア満足度	0.06985
	0.4966

Spearman の相関係数, N = 97	
H0: Rho=0 に対する Prob > r	
総成長実感	
キャリア満足度	0.06392
	0.5339

卒業年度=2025 カテゴリ=A

1 With 変数:	キャリア満足度
1 変数:	総成長実感

単純統計量						
変数	N	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値
キャリア満足度	719	3.79416	0.47137	4	1	4
総成長実感	719	3.95781	0.11091	4	3.66667	4

Pearson の相関係数, N = 719	
H0: Rho=0 に対する Prob > r	
総成長実感	
キャリア満足度	0.11783
	0.0016

Spearman の相関係数, N = 719	
H0: Rho=0 に対する Prob > r	
総成長実感	
キャリア満足度	0.14486
	<.0001

卒業年度=2025 カテゴリ=B

1 With 変数:	キャリア満足度
1 変数:	総成長実感

単純統計量						
変数	N	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値
キャリア満足度	97	2.71134	0.98909	3	1	4
総成長実感	97	2.2646	0.44602	2.33333	1	2.66667

Pearson の相関係数, N = 97	
H0: Rho=0 に対する Prob > r	
総成長実感	
キャリア満足度	0.33236
	0.0009

Spearman の相関係数, N = 97	
H0: Rho=0 に対する Prob > r	
総成長実感	
キャリア満足度	0.39674
	<.0001

表 10 総成長実感の高群・低群におけるキャリア満足度の群別相関分析（2 か年合算、カテゴリ別）

FREQ プロシジャ

度数	表：カテゴリ * キャリア満足度					
期待	カテゴリ	キャリア満足度				
セルのカイ 2 乗		1	2	3	4	合計
	A	14	25	237	1179	1455
		35.294	57.353	277.06	1085.3	
		12.847	18.25	5.7919	8.0907	
	B	26	40	77	51	194
		4.7059	7.6471	36.941	144.71	
		96.356	136.88	43.44	60.68	
	合計	40	65	314	1230	1649

カテゴリ * キャリア満足度 の統計量

統計量	自由度	値	p 値
カイ 2 乗 値	3	382.334	<.0001
尤度比カイ 2 乗 値	3	281.8304	<.0001
Mantel-Haenszel のカイ 2 乗 値	1	369.4837	<.0001
ファイ係数		0.4815	
一致係数		0.4338	
Cramer の V 統計量		0.4815	

標本サイズ = 1649

表 11 総成長実感の高群・低群におけるキャリア満足度の平均値比較（年度別）

2024年度

変数：キャリア満足度

カテゴリ	手法	N	平均	標準偏差	標準誤差	最小値	最大値
A		736	3.7541	0.5576	0.0206	1	4
B		97	2.866	0.975	0.099	1	4
Diff (1-2)	Pooled		0.8881	0.6203	0.067		
Diff (1-2)	Satterthwaite		0.8881		0.1011		

カテゴリ	手法	平均	平均の	標準偏差	標準偏差の
			95% 信頼限界		95% 信頼限界
A		3.7541	3.7137 3.7944	0.5576	0.5305 0.5876
B		2.866	2.6695 3.0625	0.975	0.8544 1.1355
Diff (1-2)	Pooled	0.8881	0.7566 1.0196	0.6203	0.5919 0.6516
Diff (1-2)	Satterthwaite	0.8881	0.6876 1.0886		

手法	分散	自由度	t 値	Pr > t
Pooled	Equal	831	13.25	<.0001
Satterthwaite	Unequal	104.43	8.78	<.0001

等分散性				
手法	分子の自由度	分母の自由度	F 値	Pr > F
Folded F	96	735	3.06	<.0001

2025年度

変数：キャリア満足度

カテゴリ	手法	N	平均	標準偏差	標準誤差	最小値	最大値
A		719	3.7942	0.4714	0.0176	1	4
B		97	2.7113	0.9891	0.1004	1	4
Diff (1-2)	Pooled		1.0828	0.558	0.0604		
Diff (1-2)	Satterthwaite		1.0828		0.102		

カテゴリ	手法	平均	平均の		標準偏差	標準偏差の	
			95% 信頼限界			95% 信頼限界	
A		3.7942	3.7596	3.8287	0.4714	0.4482	0.4971
B		2.7113	2.512	2.9107	0.9891	0.8668	1.1519
Diff (1-2)	Pooled	1.0828	0.9643	1.2013	0.558	0.5322	0.5865
Diff (1-2)	Satterthwaite	1.0828	0.8806	1.285			

手法	分散	自由度	t 値	Pr > t
Pooled	Equal	814	17.94	<.0001
Satterthwaite	Unequal	101.96	10.62	<.0001

等分散性				
手法	分子の自由度	分母の自	F 値	Pr > F
Folded F	96	718	4.4	<.0001

図 6 総成長実感の高群・低群におけるキャリア満足度の分布・平均差 (2024 年度)

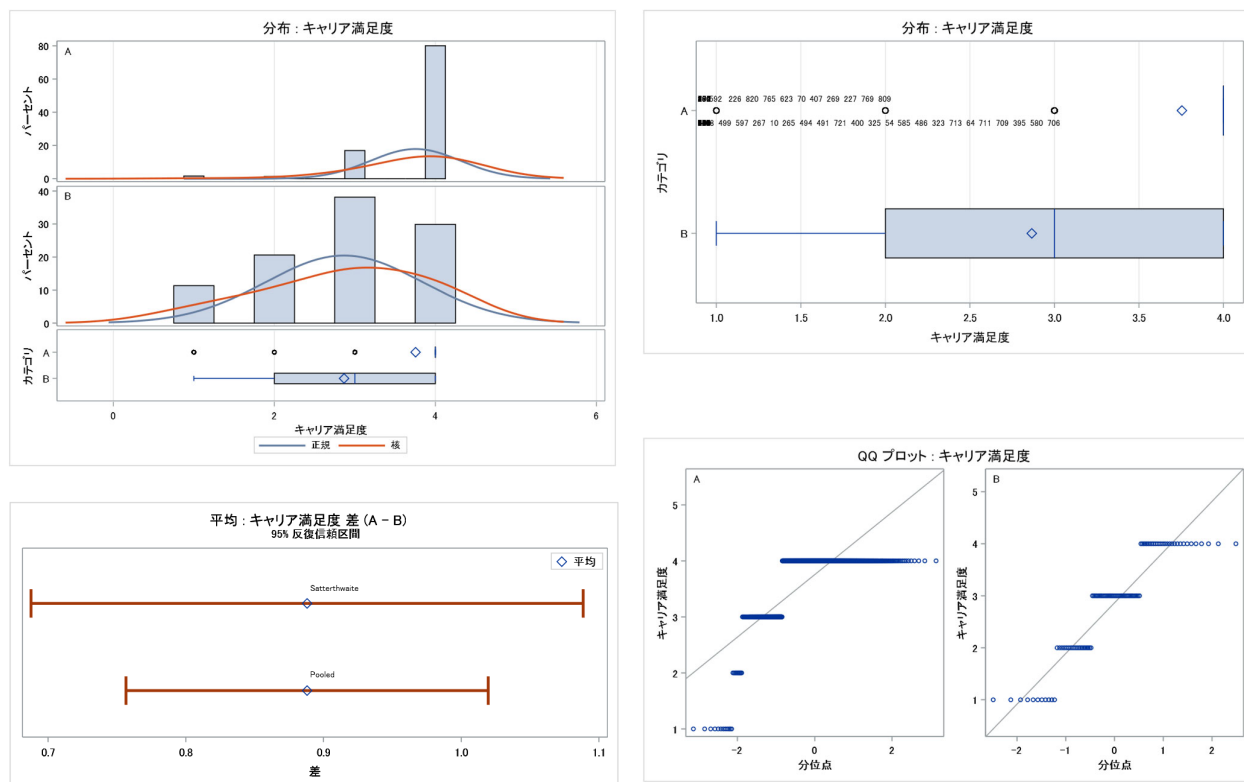
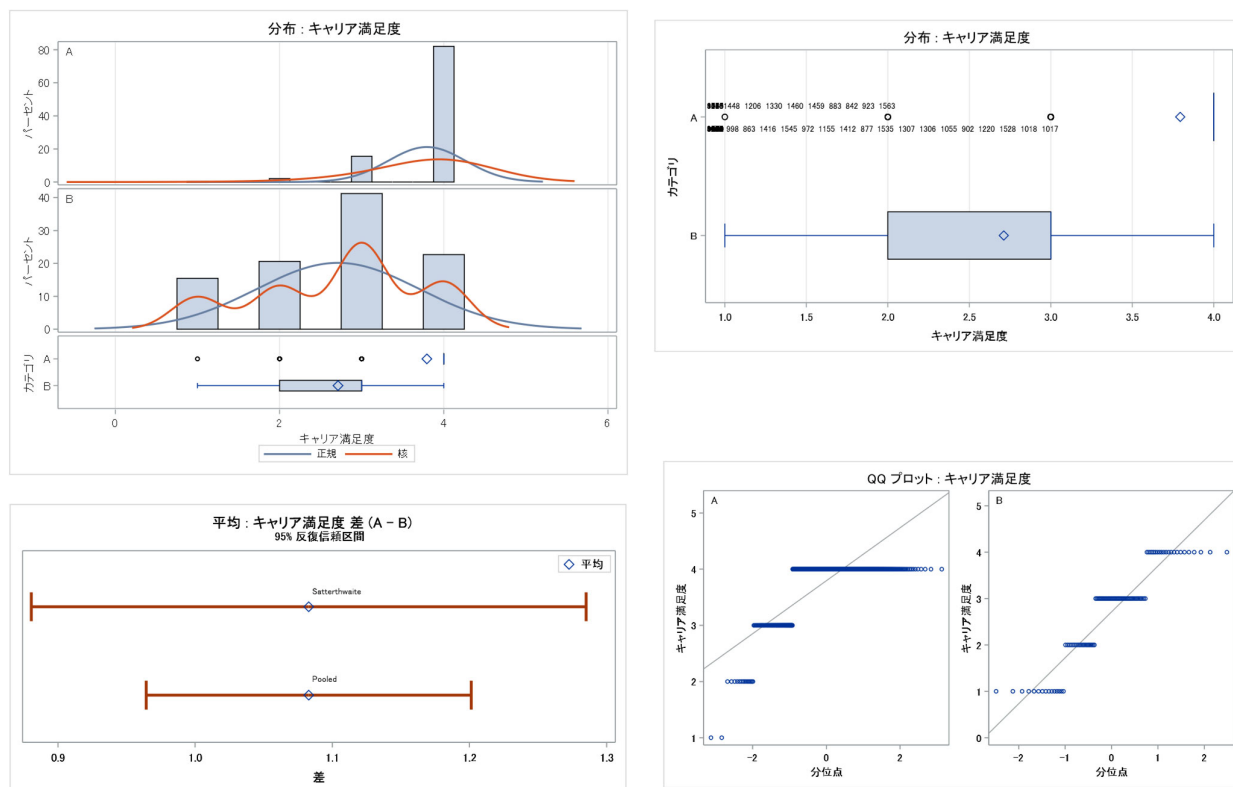


図 7 総成長実感の高群・低群におけるキャリア満足度の分布・平均差 (2025 年度)



4-4. 入学者選抜区分別にみた卒業時の成長実感(2025 年度卒業生の入学者選抜の妥当性の検証)

前節までの分析では、卒業時の成長実感とキャリア満足度との関連を確認しました。そこで、成長実感を学修成果指標として活用する可能性をさらに検討するため、2025 年度卒業生の成長実感を入学者選抜区分別に確認しました(図 8)。

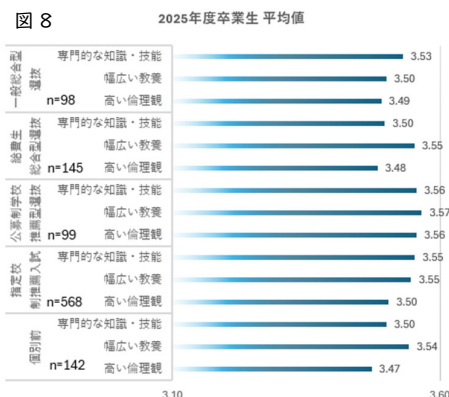
入学者選抜区分は、入学時の特性や学修経験の背景を捉える一つの観点です。本分析では、各選抜区分で受け入れた学生が本学での学修を経て、卒業時にどの程度の成長を実感しているかを確認しました。ただし、卒業時点の自己評価のみから、入学者選抜の効果と入学後の教育効果を分離して判断することはできません。

主要な入学者選抜区分では、「専門的な知識・技能」「幅広い教養」「高い倫理観」の 3 項目がいずれも 3.47 から 3.57 の範囲にあり、4 件法の中点を上回る肯定的な回答傾向が確認されました。選抜区分間の差は最大でも 0.10 点程度であり、主要区分の卒業時の成長実感は概ね同水準にあると考えられます。

また、2024 年度と 2025 年度を比較すると、項目・選抜区分によって一部上昇もみられます(図 9)。

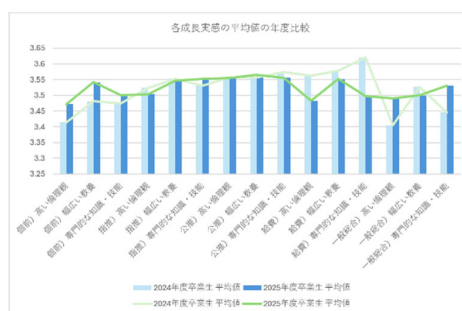
以上の結果から、主要な入試区分における卒業時の成長実感は、いずれの区分においても 4 件法平均で 3.4 を上回り、多くの項目で 3.5 前後の高い水準を示しています。卒業時の成長実感を指標とした検証において、2025 年度卒業生の入学者選抜は、入学後に本学の教育を通じて専門的知識、幅広い教養、高い倫理観を身に付ける学生を適切に受け入れているものと評価できることから、現行の入学者選抜について大きな問題は確認されず、妥当性を支持する結果が得られました。

図 8



入学者選抜区分別にみた卒業時の成長実感 3 項目の平均値 (2025 年度卒業生)

図 9



入学者選抜区分別にみた卒業時の成長実感 3 項目の年度比較 (2024 年度・2025 年度)

4-5. 入学者選抜区分別にみた成長実感(2025 年度の入学者選抜の妥当性の検証)

前項では、2025 年度卒業生を対象として、入学者選抜区分別に卒業時の総成長実感およびキャリア満足度を確認しました。これらの指標は、大学における学修や学生生活を経た最終段階の成果を示すものであり、入学者選抜の妥当性を卒業時のアウトカムの観点から検証する派生的な分析として位置づけています。

入学後の比較的早い段階において、学生が大学での学修や経験をどの程度自身の成長につなげているかを確認することも重要と言えます。在学初期の成長実感は、卒業時の教育成果そのものを示す指標ではないものの、その後の学修成果やキャリア形成につながる可能性のある先行的な指標として捉えることができると考えます。

そこで本項では、2025 年度入学者である現 2 年生を対象として、1 年次終了時点における成長実感を入学者選抜区分別に確認しました。これにより、前項で取り上げた卒業時の成果に加え、入学後の早期段階において、各選抜区分の入学者が大学での学びや経験を成長につなげられているかという観点から、2025 年度入学者選抜の状況を検証しました。2025 年度入学生を対象とした分析では、入試区分ごとの 1 年次終了時の学修状況等(学籍状況、成績/GPA分布、成長実感)を確認し、客観的な評価を行いました。

ただし、2025 年度入学者については、現時点で卒業時の総成長実感やキャリア満足度を把握することができ

ないため、本分析は、中間的な検証として位置づけ、今後、同一学生について継続的にデータを蓄積し、在学中の成長実感の推移ならびに卒業時の総成長実感およびキャリア満足度との関係を確認することにより、入学者選抜区分ごとの学生の特性と教育成果との関連を、より長期的かつ総合的に検証していく必要があります。本報告書内では、成長実感に限定し、報告を行います。

図10・表12は、2025年度入学者について、主な入学者選抜区分別に、1年次終了時点の成長実感3項目の平均値および総成長実感を示したものです。ここでいう総成長実感は、卒業時アンケートと同様に、成長実感3項目の平均値として算出しています。

分析の結果、各項目の平均値には入学者選抜区分によるばらつきがみられたものの、2025年度入学者の1年次終了時点の成長実感は、おおむね2.84から3.56の範囲に分布しています。また、総成長実感は、多くの入学者選抜区分において3点前後の値を示しており、入学後の早期段階において、一定程度の肯定的な成長認識が形成されていることが確認されたと考えます。

したがって、少なくとも1年次終了時点の成長実感という観点からは、特定の入学者選抜区分に顕著な課題があることを示す結果は確認されず、2025年度入学者選抜の妥当性を一定程度支持する結果が得られたと評価できます。

ただし、入学者選抜区分ごとに回答者数が異なることから、平均値の単純な比較のみをもって、選抜区分間の差や入学者選抜全体の妥当性を断定することはできません。

今後も同一学生を継続的に追跡し、1年次終了時点の成長実感が、その後の学修成果、卒業時の総成長実感およびキャリア満足度とどのように関連するかを確認することが重要です。そのほかの要素を加え、多面的に分析していくことはもちろんのこと、こうした縦断的な分析を蓄積することにより、各入学者選抜区分が、アドミッション・ポリシーに基づいて期待する学生を適切に受け入れているか、また、入学後の教育を通じて学生の成長を十分に支援できているかを、より精緻に評価することが可能となると考えます。

(カ) 結論

本分析では、卒業時の「成長実感」を学修成果指標として活用する可能性を検討するため、2024年度および2025年度の卒業時アンケートを用いて、キャリア満足度との関連を確認しました。その結果、成長実感3項目とキャリア満足度のSpearman順位相関係数は0.498から0.564で、いずれも統計的に有意であり、両者には中程度の正の関連が認められました。

成長実感の全体を確認するため、総成長実感の高群と低群の2つのグループに注目し、比較すると、2か年合算のキャリア満足度平均は、高群3.77点(N=1,455)、低群2.79点(N=194)で、平均差は0.99点でした。

図10 1年次終了時点の成長実感3項目と総成長実感(平均値)

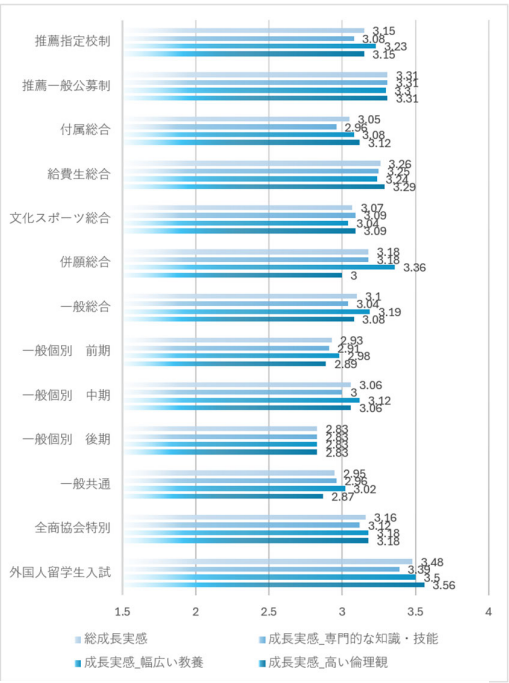


表12 1年次終了時点の成長実感3項目と総成長実感(平均値/標準偏差)

	N	総成長実感		成長実感_専門的な知識・技能		成長実感_幅広い教養		成長実感_高い倫理観	
		Mean	StdDev	Mean	StdDev	Mean	StdDev	Mean	StdDev
推薦指定校制	591	3.15	0.64	3.08	0.97	3.23	0.64	3.15	0.7
推薦一般公募制	64	3.31	0.58	3.31	0.73	3.3	0.63	3.31	0.61
付属総合	51	3.05	0.57	2.96	0.96	3.08	0.56	3.12	0.65
給費生総合	143	3.26	0.6	3.25	0.92	3.24	0.61	3.29	0.6
文化スポーツ総合	23	3.07	0.67	3.09	0.73	3.04	0.71	3.09	0.73
併願総合	11	3.18	0.58	3.18	0.6	3.36	0.67	3	0.63
一般総合	228	3.1	0.69	3.04	0.97	3.19	0.66	3.08	0.77
一般個別 前期	64	2.93	0.72	2.91	0.97	2.98	0.72	2.89	0.8
一般個別 中期	17	3.06	0.78	3	1.06	3.12	0.7	3.06	0.9
一般個別 後期	6	2.83	0.72	2.83	0.98	2.83	1.17	2.83	0.41
一般共通	54	2.95	0.73	2.96	0.99	3.02	0.81	2.87	0.78
全商協会特別	17	3.16	0.6	3.12	0.99	3.18	0.64	3.18	0.53
外国人留学生入試	18	3.48	0.69	3.39	1.04	3.5	0.62	3.56	0.62

年度別の差も統計的に有意であり、2024年度は高群3.75点、低群2.87点(Welchの $t=8.78$ 、 $p<.0001$)、2025年度は高群3.79点、低群2.71点(Welchの $t=10.62$ 、 $p<.0001$)でした。また、群内の相関は、高群では両年度とも弱い正の相関、低群では2025年度のみ弱から中程度の正の相関が認められました。一方、低群の2024年度では有意な相関は確認されませんでした。群内分析は得点範囲が限定されることに加え、低群の人数が各年度97人と少ないため、補足的な結果として扱う必要があります。

以上の結果は、大学で身に付けたと学生自身が認識する知識・教養・倫理観の総合的な成長実感(メタ認知)が、社会への移行期における進路選択への肯定的評価と一定の関連を有することを示しています。このことは、成長実感を学修成果の一側面を把握する指標として活用できる可能性を支持します。ただし、本分析は2か年の横断的な自己評価データに基づく関連性の検証であり、因果関係や教育効果そのものを示すものではありません。

本分析は成長実感の有効性を示す基礎的エビデンスとして位置付けられ、今後の本学の教学IRにおけるさらなる研究・検証につなげていくことが望まれます。今後は、学業成績、ディプロマ・ポリシー達成度、正課・正課外活動、進路状況などの客観的・多面的な指標との関係を継続的に検証する必要があります。

② 和洋女子大学

分析テーマ: 大学教育における学生の成長実感とその関連要因に関する調査結果

—卒業年度、入学選抜区分、および修得スキル間の構造的分析を通じて—

(ア) 要旨

本調査は、大学教育が学生にもたらす「成長実感」の実態とその規定要因を明らかにすることを目的とします。2025年7月から8月にかけて、2019年度、2021年度、2023年度の卒業生(有効回答数500名)を対象に本学で実施した卒業生調査・企業調査を実施しました。分析の結果、全体の約8割以上の卒業生が在学中の成長を実感していることが確認されました。卒業年度別および入学選抜区分別の比較においては、平均値に若干の差異は見られたものの、分散分析の結果、統計学的な有意差は確認されませんでした。また、成長実感と各能力・スキルとの関連性について相関分析と重回帰分析を行った結果、専門的知識や人間関係構築力が成長実感に強く寄与する一方で、情報収集・分析能力との相関は相対的に低いことが明らかとなり、今後の大学教育における情報リテラシー教育の課題が浮き彫りとなりました。

(イ) 序論

近年、大学教育の質的転換が求められる中、学生が大学生活を通じてどのような能力を獲得し、いかに自己の成長を実感できたかという「学修成果の可視化」が重要視されています。特に、卒業後に社会人として活躍する初期段階において、大学時代の成長実感が現在のキャリア形成や自己効力感にどのような影響を及ぼしているかを検証することは、大学教育の価値を再定義する上で極めて意義深いと考えます。加えて、近年の大学教育を語る上で避けて通れないのが、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的流行による教育環境の激変です。キャンパスへの入構制限やオンライン授業の急遽導入など、学生の学習形態や課外活動、他者との交流機会は著しく制限されていました。本調査では、こうした背景を踏まえ、卒業生に対するアンケート調査のデータに基づき、在学中の成長実感が卒業年度や入学選抜区分によってどのように異なるのか、また、どのような具体的な能力やスキルの修得が全体的な成長実感に寄与しているのかを実証的に検証し、これからの大学教育が取り組むべき課題を考察します。

(ウ) 調査概要と分析手法

本研究では、大学在学中における成長実感について定量的な把握を行うため、以下の要領でアンケート調査及びデータ分析を実施しました。

- 調査対象者：2019 年度、2021 年度、2023 年度の和洋女子大学の学部卒業生（卒業後社会人経験 6 年以内の若手社会人）。
- 有効回答数：500 名 回答率 27.5%（実際の調査結果の n 数は 501 名であるが、正規生ではない 1 名を除外して分析対象としました）。
- 調査実施期間：2025 年 7 月～8 月。
- 評価方法：成長実感度については、5 点満点の評価法を採用しました。
- 分析手法：属性間の差異を検証するための「分散分析」、変数間の関連性を探る「相関分析」、および成長実感に影響を与える要因を特定するための「重回帰分析」を実施しました。

(エ) 調査結果

1. 成長実感の全体傾向と卒業年度別の比較

「在学中を通じて自分は成長できたと実感できたか」という設問に対し、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と肯定的に回答した卒業生の合計は全体の 83.6%に上りました。この結果から、多くの学生が大学教育を通じて自己の成長を認識していることが示されました（Table1 図表 1）。しかし、「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」といったネガティブな回答群の割合に注目すると、年度ごとに若干異なる傾向が確認されました。

肯定的な回答（「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の合計）の割合を年度別に比較すると、2019 年度が 89.3%と最も高く、次いで 2023 年度が 83.3%、2021 年度が 80.0%という結果でした。これを 5 点満点の平均値で比較すると、2019 年度の卒業生が 4.26 と最も高く、2021 年度は 4.08、2023 年度は 4.19 となりました。2019 年度と比較して、2021 年度および 2023 年度の平均値が低い背景には、当該年度の学生が在学中に直面したコロナ禍による活動制限が少なからず影響している可能性が示唆されます（Table1 図表 2）。この平均値の差異について統計学的な検証を行うため、分散分析を実施しました。その結果、有意差はみられず、卒業年度間において成長実感に明確な差がないことが判明しました。また、効果量の指標であるイータ 2 乗についても、意味のある差を示す数値は確認されませんでした（Table1 図表 2-1）。

2. 入学選抜ごとの成長実感度の平均値比較

次に、入学経路の多様化が成長実感に与える影響を検証するため、学生を入学時に受けた試験内容（選抜区分）ごとに分類し、比較分析を行いました（Table2 図表 3）。

- 一般選抜：平均値 4.12
- 総合型選抜：平均値 4.15
- 推薦選抜：平均値 4.22

上記のとおり、推薦選抜による入学者の平均値が僅かに高い傾向が見られたものの、分散分析を実施した結果、統計学的に有意な差はみられませんでした。先述の卒業年度別の結果と併せ、卒業年度別や入学試験別に成長実感の有意な差に違いがないことが確認されました（Table2 図表 3-1）。

3. 成長実感と各種スキル・変数との関連性

全体的な成長実感が、具体的にどのような能力やスキルの獲得と結びついているのかを明らかにするため、相関分析を実施しました。その結果、調査対象となったすべての質問項目において、中程度から弱い相関が確認されました。しかし、項目ごとの相関係数を詳細に見ると課題も浮き彫りとなりました。「情報を多角的に分析し正確に把握する能力」や「情報を分析し課題の原因を明らかにする能力」など、情報を扱い分析する能力に関する複数の項目においては、他の対人関係スキルや専門知識の項目と比較して相関係数が低いことが判明しました（Table3 図表 4-1）。さらに、成長実感に直接的な影響を与えている要因を特定するため重回帰分析を実施しました。その結果、以下の4つの項目が成長実感に有意な影響を与えていることが特定されました（Table3 図表 4-2）。

- ・専門科目で学んだ知識と技能 (** $p < .001$)
- ・他者との豊かな関係構築 (** $p < .001$)
- ・目標達成に向けた実践行動力 (** $p < .001$)
- ・主体的でよい行動の習慣づける能力 (** $p < .001$)

(オ) 考察

1. コロナ禍における大学教育のレジリエンス

本調査で最も注目すべき点の一つは、コロナ禍の影響を強く受けた2021年度および2023年度の卒業生において、平均値の低下は見られたものの、2019年度と比較して統計学的な有意差は認められなかったという事実です。これは、パンデミックという未曾有の危機的状況下においても、オンライン教育の迅速な展開や教職員の支援体制の構築により、大学教育が本質的に提供すべき「学生の成長機会」が一定水準で維持されていたことを意味します。大学という高等教育機関が持つ教育的レジリエンス（回復力・適応力）の高さを示す結果であると評価できます。

2. 入学経路の多様性と成長の均質性確保

一般選抜、推薦選抜、総合型選抜という異なる入試形態を経た学生間で、卒業後の成長実感に有意差が見られなかったことも重要な知見であると考えます。入学時の学力水準や評価軸が異なる学生集団であっても、在学中のカリキュラムや大学生活を通じて、最終的には同等の成長実感を得て卒業していることが示されました。これは、現在の大学教育が多様な背景を持つ学生に対して包摂的に機能しており、効果的な教育機会を均等に提供できていることの証左と言えます。

3. 成長を牽引する4要件と教育プログラムの方向性

重回帰分析により抽出された4つの要因（専門知識、関係構築、実践行動力、主体的習慣）は、大学教育の根幹をなす要素です。「専門科目で学んだ知識と技能」というハードスキルと、「他者との関係構築」や「主体的行動」といったソフトスキルが両輪となって成長実感を形成していることが分かります。今後のカリキュラム編成においては、座学による専門性の追求だけでなく、PBL（課題解決型学習）やグループワークなどを通じて他者と協働し、主体的に実践する機会を意図的にデザインすることが、学生の成長実感を最大化するための鍵となると考えます。

4. 情報分析能力の育成という喫緊の課題

本調査において最も深刻な課題として指摘すべきは、相関分析で明らかになった「情報を扱い分析する能力」に関する相関係数の低さです。現代社会はビッグデータや AI が牽引するデータ駆動型社会 (Society 5.0) へと急速に移行しており、多角的な情報分析に基づく課題解決能力は、あらゆる職種で求められる必須のリテラシーとなっています。しかし、本結果は、学生自身が「情報の収集・分析」を自己の成長と強く結びつけて認識できていない実態を示しています。これは、現在の教育プログラムにおいて、情報リテラシー教育が単なるツールの操作方法の習得にとどまっており、実践的な課題解決や自己成長に直結する生きたスキルとして教授しきれていないことを示唆している可能性があります。

(カ) 結論と今後の展望

調査結果から約 8 割以上の卒業生が在学中の成長を実感しており、その実感は卒業年度や入学経路によって有意に左右されるものではないことが確認されました。また、成長実感は「専門性」「対人関係」「実践力」「主体性」の 4 要素によって強く支えられていることが判明しました。

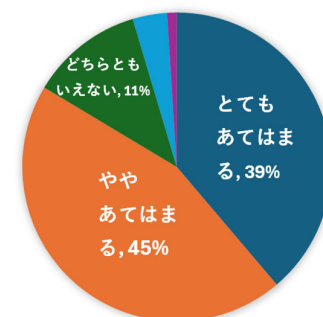
一方で、情報の多角的な分析や課題原因の特定といった「情報を扱う能力」に対する成長実感が相対的に希薄であることは、本学にとってこれからの教育における明確な課題です。今後の大学教育は、従来型の専門教育や対人関係スキルの醸成を維持しつつ、データサイエンスや情報分析の要素を全学横断的にカリキュラムへ統合していく必要があると考え、2028 年度から本学では、全学部・全学科へ「AI・データサイエンス基礎」を必修化することが決まりました。情報を収集・分析し、それを用いて新たな価値を創出する経験を蓄積させることが、次世代を担う学生のさらなる成長実感の向上と、社会で活躍する人材の育成の一助になることを目指していきたいと願っています。

Table 1 在学中を通じて自分は成長できたと実感できるか

図表 1

n=500

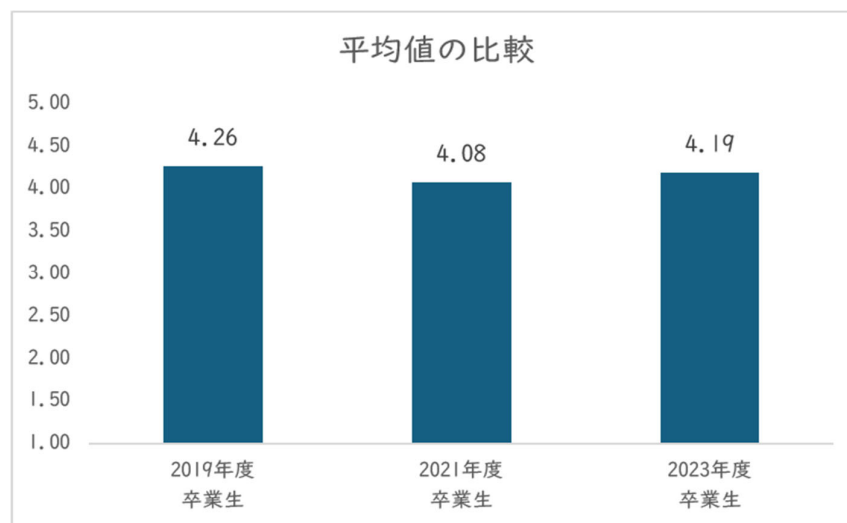
	在学中を通じて自分は成長できたと実感できる					合計
	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない	
2023年度卒業生	93 40.8%	97 42.5%	28 12.3%	8 3.5%	2 0.9%	228 100.0%
2021年度卒業生	55 34.4%	73 45.6%	22 13.8%	9 5.6%	1 0.6%	160 100.0%
2019年度卒業生	46 41.1%	54 48.2%	9 8.0%	1 0.9%	2 1.8%	112 100.0%
合 計	194 38.8%	224 44.8%	59 11.8%	18 3.6%	5 1.0%	500 100.0%



注) 実際の調査結果の n 数は 501 だが、正規生ではない 1 名は除外している

■卒業年度ごとに分けた成長実感度の平均値比較について

図表 2



■一元配置分散分析結果

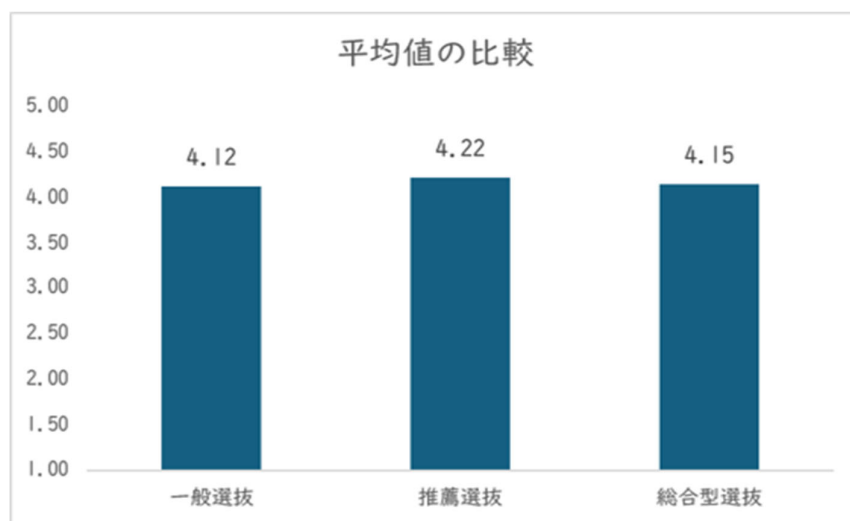
図表 2-1

	n	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
2019年度卒業生	228	4.26	0.791	0.075	4.11	4.41	1	5
2021年度卒業生	160	4.08	0.873	0.069	3.94	4.21	1	5
2023年度卒業生	112	4.19	0.847	0.056	4.08	4.30	1	5

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	イータの 2 乗
グループ間	2.407	2	1.203	1.692	0.185	0.007

Table2 入学選抜ごとの成長実感度の平均値比較について

図表 3



■一元配置分散分析の結果

図表 3-1

	n	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
一般選抜	185	4.12	0.860	0.063	4.00	4.25	1	5
推薦選抜	207	4.22	0.780	0.054	4.11	4.32	1	5
総合型選抜	108	4.15	0.935	0.090	3.97	4.33	1	5

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	イータの 2 乗
グループ間	0.900	2	0.450	0.630	0.533	0.003

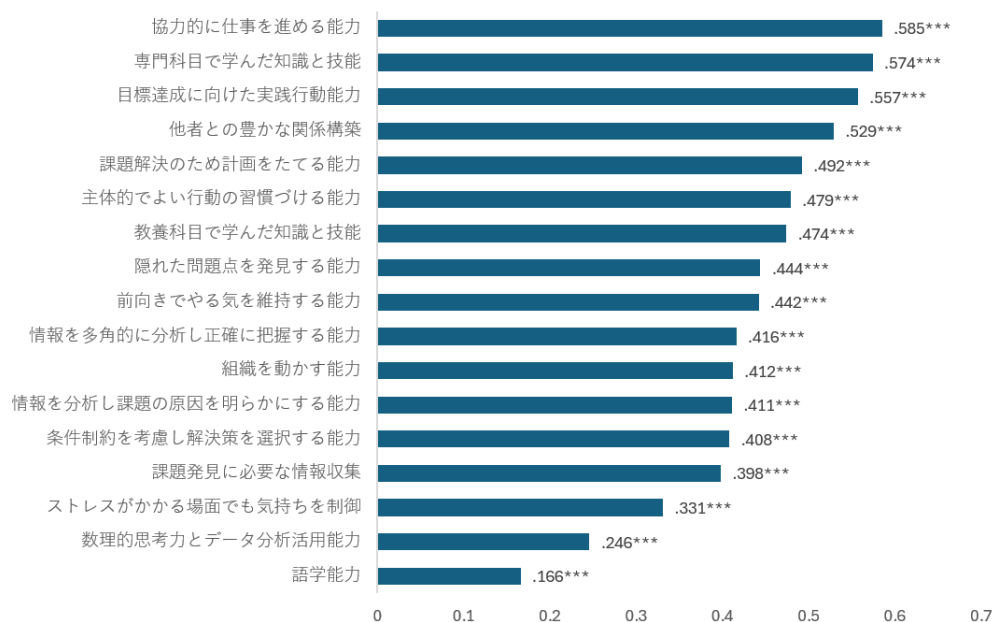
Table3 成長実感と他の変数との関連性について

図表 4 質問項目

従属変数	在学中を通じて自分は成長できたと実感できる
独立変数	他者との豊かな関係構築
	協力的に仕事を進める能力
	組織を動かす能力
	ストレスがかかる場面でも気持ちを制御
	前向きでやる気を維持する能力
	主体的でよい行動の習慣づける能力
	情報を分析し課題の原因を明らかにする能力
	課題解決のため計画をたてる能力
	目標達成に向けた実践行動能力
	専門科目で学んだ知識と技能
	教養科目で学んだ知識と技能
	語学能力
	数理的思考力とデータ分析活用能力
	課題発見に必要な情報収集
	情報を多角的に分析し正確に把握する能力
	隠れた問題点を発見する能力
	条件制約を考慮し解決策を選択する能力

■相関分析結果

図表 4-1



注) **p<0.001

図表 4-2

■重回帰分析結果

	非標準化 係数	標準化 係数	t 値	有意確率
	B	ベータ		
(定数)	0.959		6.129	***p<.001
協力的に仕事を進める能力	0.247	0.258	5.376	***p<.001
専門科目で学んだ知識と技能	0.290	0.286	6.794	***p<.001
目標達成に向けた実践行動能力	0.162	0.162	3.516	***p<.001
他者との豊かな関係構築	0.111	0.121	2.617	***p<.001
調整済み R2 乗	0.465			

注) ステップワイズ法

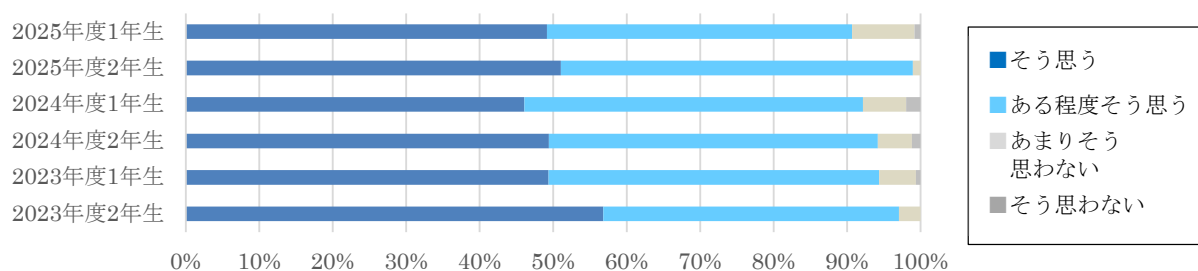
③ 昭和学院短期大学

分析テーマ:「昭和学院短期大学の学生の成長実感について」

昭和学院短期大学は、学生満足度調査において、総合的に「大学の学びによって自分自身の成長を実感しているか」を質問しています。また、学生生活に関する調査において、学生が在学中の学びを通じてどのような能力の向上を実感しているかを把握するための質問を設けています。本報告では、2023 年度から 2025 年度までの調査結果を用いて、学生の成長実感について分析を行いました。

(ア)【大学での学びによって自分自身の成長を実感している】

2023 年度から 2025 年度まで 1 年生と 2 年生別に大学での学びについて成長実感を「そう思う」「ある程度そう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の選択肢から回答を得ました。



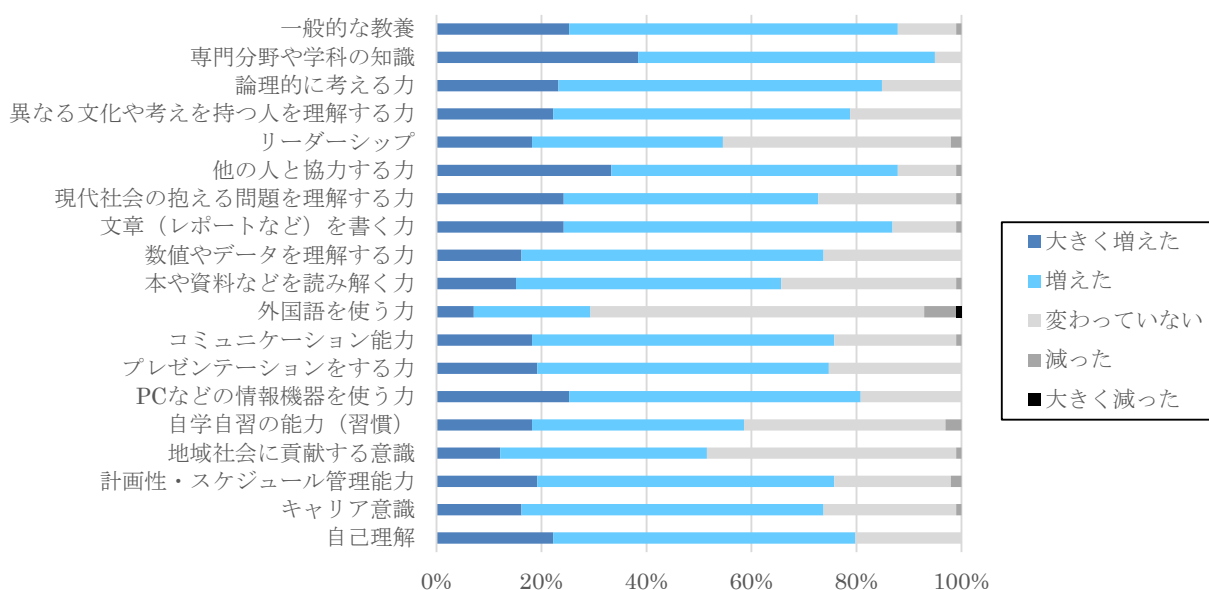
図③-1 大学での学びによって自分自身の成長を実感している

その結果「そう思う」「ある程度そう思う」をあわせるといずれも 90%以上が成長実感を得ています。どの年度も 2 年生の方が成長実感の割合は高くなっており、2023 年度 1 年生は 2024 年度の 2 年生、2024 年度の 1 年生は 2025 年度の 2 年生になりますが、後者では 2 年生でかなり高くなっています。

(イ)【大学での学びと能力の向上】

分析対象は、一定の学修経験を有する 2 年生としました。回答は、「大きく増えた」「増えた」「変わっていない」「減った」「大きく減った」の 5 つの選択肢から得ました。2025 年度の 2 年生の結果を図③-2 に示しました。

図③-2 大学での学びと能力の向上



「大きく増えた」と「増えた」を合わせて 80%以上の項目は高い順に「専門分野や学科の知識」、「他の人と協力する力」、「一般的な教養」、「文章（レポートなど）を書く力」です。これに対して特に低い項目は低い順に「外国語を使う力」、「地域社会に貢献する意識」、「リーダーシップ」、「自学自習の能力（習慣）」です。

調査した項目をディプロマポリシー、カリキュラム・マップ、学生の自己評価等の観点から「（分類1）何を知り理解しているか」→「（分類2）どう考え、どう活用し、何ができるか」→「（分類3）自ら学び他者と協働して社会とどう関わるか」に従って3つに分類しました。具体的には、分類1は「知識・理解」、分類2は「思考判断・表現・技能」、分類3は「主体性・協働・社会性」となります。各領域のおよその傾向を把握すると同時に、主体的な学びの要となる「自学自習の能力（習慣）」と各項目との相関性を調べました。

分析にあたっては、「大きく増えた」を2点、「増えた」を1点、「変わっていない」を0点、「減った」を-1点、「大きく減った」を-2点として得点化し、各項目の平均値を算出しました。平均値が高いほど成長実感が高いことを示します。また、「自学自習の能力（習慣）」と各項目との相関性は統計処理によって相関係数を算出しました。

表③-1 成長実感に関する項目別、分類別平均値

分類1 平均値	1.13	分類2 平均値*	0.97	分類3 平均値	0.87
一般教養	1.12	論理的思考	1.08	リーダーシップ	0.71
専門知識	1.33	文章（レポートなど）作成力	1.10	協働力	1.20
現代社会の理解	0.96	数的理解力	0.90	地域社会貢献意識	0.63
異文化理解	1.01	読解力	0.80	キャリア意識	0.89
		情報機器活用力	1.06	自学自習力	0.74
		外国語運用力	0.28	計画性・スケジュール管理能力	0.93
		コミュニケーション力	0.93	自己理解	1.02
		プレゼンテーション力	0.94		

分類2 平均値＊：外国語運用力を除く

表③-2 自学自習力と各項目の成長実感との相関係数

分類1 平均値	0.318	分類2 平均値	0.441	分類3 平均値	0.456
一般教養	0.328	論理的思考	0.437	リーダーシップ	0.412
専門知識	0.328	文章(レポートなど)作成力	0.501	協働力	0.348
現代社会の理解	0.466	数的理解力	0.421	地域社会貢献意識	0.583
異文化理解	0.148	読解力	0.489	キャリア意識	0.336
		情報機器活用力	0.374	自学自習力	-
		外国語運用力	0.476	計画性・スケジュール管理能力	0.605
		コミュニケーション力	0.439	自己理解	0.460
		プレゼンテーション力	0.390		

表③-1 に示すように分類1の「知識・理解」の成長実感が高く、分類3の「主体性・協働・社会性」はやや低くなっています。分類3は、地域貢献活動などへの積極的な学生参加を促すことや、企業連携授業、アクティブラーニング等の充実を図るなど検討課題が多い分野です。

次に、自学自習力の成長実感と各項目の成長実感との相関係数を求めた結果、自学自習力の成長実感は、異文化理解以外のすべての項目において相関性がみられました。特に、計画性・スケジュール管理能力(0.605)、地域社会貢献意識(0.583)、文章作成力(0.501)、読解力(0.489)、外国語運用力(0.476)、現代社会の理解(0.466)では相関性が高くなりました。

自学自習力は知識・思考力だけでなく、コミュニケーション・社会的能力や主体的学習とも関連している可能性が示唆されました。

(ウ)【まとめ】

以上のことから、本学において、90%以上の学生が成長実感を得ており、特に知識・理解は高い水準を得ています。

また、自学自習力の成長実感が高い学生ほど、他の能力についても高い成長実感を示す傾向がみられたことから、主体的な学習行動を促進する教育的取組が、学生の総合的な成長につながる可能性が示唆されました。

今後は、学科・専攻別の特徴や関連要因について分析を進め、本学における教育成果の把握と教育改善に活用していきます。

④ 環太平洋大学

分析テーマ:「環太平洋大学国際経済経営学部(新学部)の学生成長について」

(ア) 東京経営短期大学の閉学と環太平洋大学新学部の開始

最初に短大から4大への移行と教育システムの併設について報告します。東京経営短期大学(TMC)では、経営総合学科・こども教育学科2年次生は2026年3月に全員が卒業し、ほぼ全員が進路を確定しました。後期の単位がかなり厳しい学生もいましたが、全員の意識向上と相互連絡を十分に展開し、密な指導を重ねて卒業にこぎつけたことで、学生の成長実感はとても高まったと感じました。卒業式その他の行事などにおける学生諸君の意見もその実感を裏付けるものでした。

また同時に 2025 年 4 月より環太平洋大学 (IPU)・国際経済経営学部 (新設) の新 1 年生が入学し、4 年制大学の 1 年次教育がスタートしました。実際、本学教職員体制には組織替えに伴い、かなりの入れ替えが生じました (新任教職員の着任、ベテラン・中堅教員の離任など)。その結果、教育・連絡集計システムの併存 (各 LMS ソフトウェアシステムの平行運用含む) などにも関して新旧教職員にはかなりの負担が生じ、未経験の事態も多々生じて、対応に相当の時間と労力が費やされたのが正直なところでした。

特に、IPU 国際経済経営学部の方針として、留学生の受け入れにも力を入れた結果、全体で約 40% の留学生が入学しました。彼らの出身国はミャンマー、ベトナム、スリランカ、マレーシア、ネパール、中国など広い範囲にわたっています。IPU はニュージーランド校・岡山 (大学本部)・東京キャンパス (本学部) と、現在は国内外に 3 キャンパスを有する大学であり、本学部グローバルスタディセンター (IPU-Tokyo GSC) との密接な教育協力を基盤として、これら留学生の教育をスタートしています。

(イ) 新学部での学生生活 (学友会やクラブ活動、学校行事など) について

2025 年度は上記の 2 教育組織と所属学生が共存した状態で教育運営がなされたので、学友会、学校行事、クラブ活動 (新設活動申請含む) などでも、東京経営短期大学 (TMC) 2 年次生と環太平洋大学 (IPU) 新 1 年次生とで移行期間として両学生が協同で運営を実施しました。教員側の実感としては、学友会活動の運営体制は TMC 2 年次生側に女性委員が多く、IPU 1 年次生側は男性委員が多数を占め、卒業・就職活動時の TMC 学生と IPU 新入生との間に、意識のずれ (余裕のようなものの差) が生じた印象でした。なお、2025 年度としては、学友会の規則運営や学校行事は TMC の体制・日程をおおむね維持した結果、岡山の IPU 大学本部側の学生組織との連携は、移行時期的な折衷型となりました。

(ウ) 学生の成長実感について (1 年次生へのアンケート結果例をもとに)

IPU-Tokyo としては、まだ全学年が揃っておらず、学生には 3 コース制 (ビジネスデザインコース、DX イノベーションコース、観光ホスピタリティコース) を 2 年次後期に選択 (希望自体は入学時より集計) するシステムでスタートしています。今年度の報告としては新 1 年次生の成長度を示すことに留まりますが、実例として、4 年制の大学としての必要条件や大学生活などを学ぶ通年の必修授業である基礎ゼミナール I (以下基礎ゼミ I) のアンケート結果に基づき、学生の成長実感を報告します。1 年次通年基礎ゼミ I は全学生約 150 名を 8 班 (+日本語補強班) に分け、各班 2 名の教員を割り振って指導にあたり、大学教育情報の取得方法、文献調査やレポートの作成、発表、社会・地域との連携など大学生新生活の必要事項を学ぶ授業です。学生へのアンケートは通年授業の終了時の 1 月から 2 月初頭までの期間で実施されました。

右図は当該アンケートの回答数の纏めであるが、未回答者数に関しては日本人学生が留学生に比べて相当数多く、これは日本人学生が 4 年制大学入学後の学生生活に関して時間的余裕 (モラトリアム的に) を誤解している可能性があると思われます。また留学生・日本人学生共に未回答者に関しては授業の出席率などとの相関があることが判明し

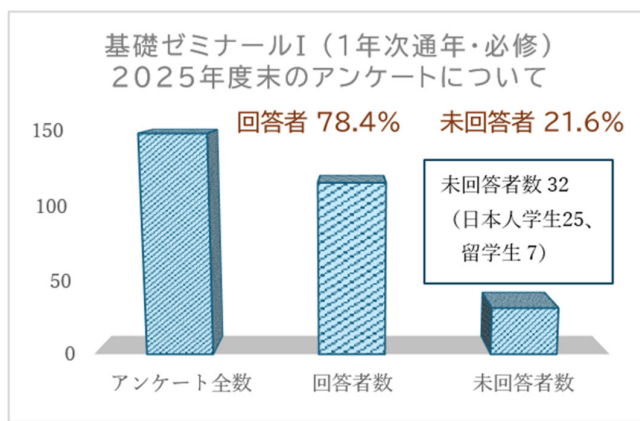


図 1 通年必修の新入生授業 (基礎ゼミナールの回答数)

ています。留学生に関しては日本語能力差の問題や学資など国別の事情もありますが、今後とも学生の成長実感と学習意欲を増進してもらえよう努力を重ねたいと考えます。実感として、必修授業であるため教職員側でも相当密に学生と連絡を取った結果であるので、系列校との連携連絡も含め今後の課題として重く受け止める必要があります。

図2は基礎ゼミⅠの授業内容に関して対象学生のニーズへの合致感を調べたアンケート結果です。1年次ということで、入学した留学生の期待感の大きいことが評価5の回答数から見受けられます。一方、日本人学生は、国内の大学受験情報などによる序列の影響も考えられるような、「期待はするけれども、あまり過度なニーズ合致感はなかった」的な判断をしたことも分かりました。高等教育(大学)の教育研究活動に関する日本人の知識が、まだ入試方法・順位などに偏在している可能性も考えられます。一方、平均評価以下の2や1を回答した学生数は少なく、全体として大学生活の各スタンダードを教える必修授業の効果は高いと判断できました。

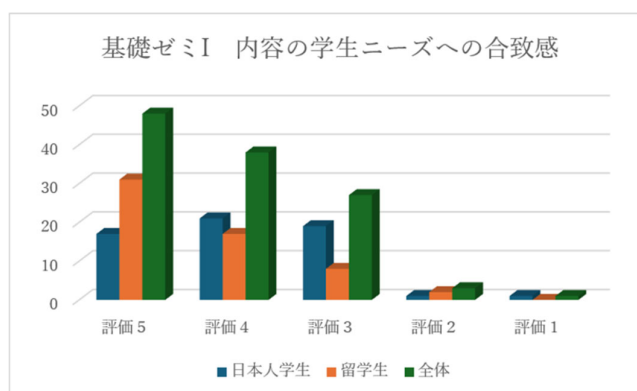


図2 授業内容の学生受講ニーズへの合致感

図3は基礎ゼミⅠ受講後の各学生の自信が高まったかどうかのアンケート結果を示しています。評価5, 4の回答がやはり留学生に多く、当該学生群に関しては授業の成果があったと考えます。一方、日本人学生は評価5の回答数がやや低く、4や3の評価が多かった、また2の評価も若干あり、1年次の結果だけではまだ判定不能といったところの結果です。なお、満足度に関するアンケート結果も同様な傾向を示しており、概ね学生の1年次終了時の評価は比較的良好であったと考えられます。なお、学生の成長実感の定着と評価には、2年次以降の本学の教育展開に待つということかと判断しています。

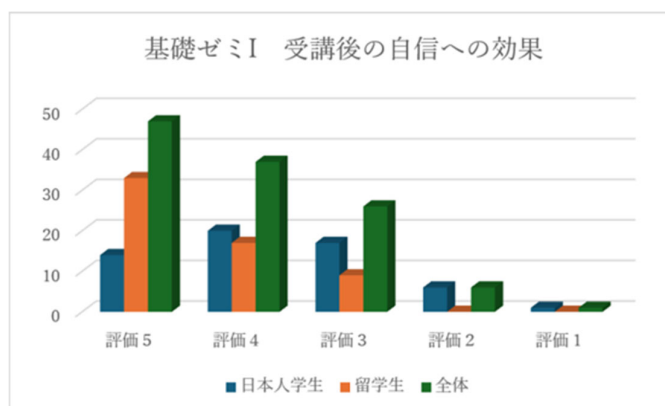


図3 基礎ゼミⅠ受講後の自信への高まりの実感

(エ) アンケート回答を踏まえて

上記のように、大学新入生に対する通年必修の基礎ゼミナールのアンケート回答は概ね良好で、私共教職員も少しほっとしている状態です。なお図1に関して記したように、未回答者(日本人学生が留学生の3倍強と多かった)の問題は重要で、大学生活に関する学生の主体的な関与を増やすべく、いかにして意識向上を共に図るか、本学の努力が問われるところと感じています。いずれにせよ3年次前には就職など進路の問題、ゼミ所属研究の開始、4年次には卒論研究の展開や卒業資格の問題など、各学生には自己管理と人生設計に関する待ったなしの展開が控えているので、学生の成長実感には大きな変化があると予測されます。

なお、参考までにアンケートの記述欄(授業で得た学習成果、自由記述・感想など)の内容の一部を以下に記します。

日本人学生：☆人と協力する力が身についた。☆国際経済経営についての向き合い方が分かった。☆色々な同級生や留学生とコミュニケーションをとることができた。異なる文化の中でも、コミュニケーションの仕方について、直接留学生と関わることで学ぶことができた。☆一年間同クラスで共同できたことは隣人との仲を深められると同時に、大学で頑張っていけると言う自己効力感にも繋がったと感じる。☆文化祭などでみんなとコミュニケーションをとり連携する機会があって親交が深まった気がした。☆先生たちやゼミの人と仲良くなった。☆発表が苦手だったけど少しだけ成長ができた。☆各教科に共通して、学びへの意識が高まった。☆ゼミのグループワークを通して人とのコミュニケーションがうまくとれるようになりました。☆様々な人がいるこの学部で、目的が違う方々と同クラスになれた機会は貴重だったと感じる。☆共同活動の難しさを実感した。☆前期と後期で、文化祭もありみんなの仲が深まりコミュニケーションが増えてよかった。☆自身が高まった。

留学生：◎この授業を通して、基礎的な知識を身につけることができました。また、物事を考える力や、自分の意見を持つことの大切さを学びました。◎私たちの担任の先生方にとても誇りを感じています。彼らは生徒たちに対してとても思いやりがあり、気を配ってくれます。◎このゼミを通して、資料作成や発表の基礎的な力を身につけることができました。◎課題解決に向けたグループ討議を通じて、多角的な視点を持つ重要性和、自分の意見を明確に伝えるコミュニケーション能力を得ました。◎特定のテーマについて自ら調べ、考え、まとめる力を身につけることができた。資料作成や発表、意見交換を通じて、論理的に考える力や自分の考えを分かりやすく伝える力が向上したと感じている。また、他者の意見を聞くことで、多様な視点から物事を捉える重要性を学んだ。◎最初の時にこの授業のおかげで、自分のゼミとコミュニケーションできました。◎コミュニケーション能力は以前より強くなってきました。◎基礎ゼミナールⅠを通して、大学での学び方やレポート作成、発表の基本を身に付けることができました。少人数でのゼミ形式のため、意見交換がしやすく、考えを深める良い機会になりました。先生方の指導も丁寧で、安心して授業に取り組むことができました。今後の学修の基礎として、とても有意義な授業だったと思います。◎本授業を通して、大学での学びに必要な基礎的な考え方や姿勢を身につけることができました。少人数での活動を通じて、意見交換の大切さを学びました。

(オ) おわりに

なお、環太平洋大学では IPU-Tokyo の教員達の協力により、学部Ⅰ年次から国内外への学会発表を目指す試みを実施しています。新Ⅰ年次生に呼びかけを行い、所属希望コースに関わらず、希望者を募り、2025年9月にタイ・チェンマイで開催された SICE/FES(日本計測自動制御学会他共催)においてⅠ年次生4名(日本人)がポスター発表(英語)を行いました。4月末から装置を組み上げ、実験を行い、まとめ、英語で概要を書いて応募、審査の結果アクセプトされ、実際に国際学会で自作ポスターを前に発表と質疑応答を英語で行ったことは、各学生にとって初めてで大変なことで



したが、各学生の成長実感・国際感覚の変化は大きく、全参加学生の帰国後の大きな成長に繋がっています（右写真）。

今年度は同じ国際学会（横浜開催）に留学生も含め、1,2 年次で9名（6 研究）が発表にエントリーし、アクセプトされています。この活動はこれからも国内外の大学・高専などの高等教育機関とも連携し、充実させたいと考えています。

4.まとめと今後の課題

本共同 IR では、「学生の成長実感」を共通テーマとして、千葉商科大学、和洋女子大学、昭和学院短期大学および環太平洋大学国際経済経営学部において実施されている各種学生調査の結果を活用し、それぞれの視点から分析を行いました。

各校の分析結果からは、調査方法や対象、設問内容は異なるものの、多くの学生が大学・短期大学での学びを通じて自身の成長を実感していることが確認されました。また、その成長実感は、専門的な知識・技能の習得だけでなく、コミュニケーション能力、他者との協働、主体性、実践力、人間関係の構築など、幅広い能力の形成と関連の可能性についても、示されました。これらは、大学コンソーシアム市川が目指す「地域つながり力」を持つ人材育成の方向性とも合致しており、各校の教育活動が一定の成果をあげていることが伺えます。一方で、各校の分析からは、今後の課題も明らかになりました。

「学生の成長実感」は、教育改善の方向性を検討するための有効な視点であり、継続的に分析を行う意義が改めて確認されました。今後の共同 IR 活動においては、各校の特徴や課題を踏まえながら、学生の成長実感に影響を与える要因について、更なる分析を進めるとともに、情報リテラシー教育、主体的学習の促進、地域連携活動、多様な学生が共に学ぶ教育環境づくりなど、共通する教育課題に関する知見の共有を進めていくことが重要です。

また、学生の成長実感を様々な要素との関連から捉える視点についても引き続き検討を深め、大学コンソーシアム市川における教育・研究活動および内部質保証の充実に資する共同 IR として発展させていきたいと考えています。

以上